

平均で個人を決めつける、生態学的誤謬 (Ecological Fallacy)

記事のURL

<https://www.gklibrarykor.com/ja/article/10651/>

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

ある地方紙に「所得の高い地域ほど、特定の政党の支持率が高い」という記事が載ったとしましょう。多くの人はこの記事を読んで、自然と「お金持ちはその政党が好きなんだな」と考えます。ところが、実際に一人ひとりを調べてみると、正反対の結果が出ることもあります。集団の数字をそのまま個人に当てはめるときに生じるこの錯覚こそが、「生態学的誤謬 (Ecological Fallacy)」です。生態学的誤謬とは、簡単に言えば、地域や国、学校といった集団を単位として集めたデータから得た結論を、その集団に属する個人にも同じように当てはめると推論する誤りを意味します。ここでいう「生態学的」とは生物学のことではなく、個人を取り巻く集団レベルのデータを指す統計用語です。本記事では、生態学的誤謬という名前がどのように生まれたのかから、集団データと個人データが食い違う原理、実際によく出会う事例、そしてこの落とし穴を避ける方法まで、順に見ていきます。集団の数字が個人の代わりにならない理由「生態学的誤謬」という名前の始まり 生態学的誤謬は、ある社会学者がアメリカの国勢調査データを計算し直したことで、広く知られるようになりました。(1) ロビンソンの1950年の論文アメリカの社会学者ウィリアム・ロビンソン (William S. Robinson) は、1930年の国勢調査データを使い、州ごとに外国生まれの人口の割合